北部タイ高地に生育する絶滅危 惧種シャムアギナシのジベレリ ン処理による花成誘導

○原田二郎（福井県立大）・S. ズングソンティポーン（タイ農
業局）・中村しのぶ（福井県立大）・伊藤一幸（農環研）

著者らは、1985年12月から1987年 1月まで北部タイ（チェンマイ、チェンライ、メーホンソン、ターク、プレー、ナン、ランパーン、ペチャブン）高地の植生調査を行い、タイから未記録の植物 7種を発見した（Harada et al. 1987 Weeds in the Highlands of Northern Thailand）。その中の 1種がミャンマーとの国境に近いメーホンソン県パントンパレスの水田で1986年 1月13日に発見したオモダカ科の植物で、シャムアギナシと命名し、当時は葉腋に多数の小球茎を着けるオモダカ科植物はアギナシ以外知らなかったこともあり、*Sagittaria aginashi* として報告した。

その後、中国でアギナシに類似した 2種が発見され、それぞれ新種として報告されていることを知った（Chen 1989 Systematic and Evolutionary Botanical Studies on Chinese *Sagittaria*）。その中で *S. lichuanensis*は湖北省利川の標高 1650mの泥炭湿地に生育し、*S. wuyiensis*は広東、江西、福建 3省にまたがる武夷山山脈の500~1500mの山間盆地の溪谷湿地に分布する。両種とも分布域の極めて限られた貴重な植物である。シャムアギナシは前 2種と比較すると、*S. wuyiensis*に類似するが、発見地でも開花は全く見られず、またバンコクのタイ農業局雑草研に移植して栽培した場合も10年以上も開花しないため、種の同定は今後の課題となっている。

著者らは、オモダカ科植物で花成を促進する効果を示すと報告されているジベレリン（GA）を用いてシャムアギナシの花成誘導を試みた。すなわち、2001年 5月27日 1/5000aワグネルポットに水田育苗土壌を充填し小球茎を 4個置床した（3反復）。6月18日（6葉期）にジベレリンをポット当たり 3mg土壌処理し、ガラス室内で生育させ、その後の生育経過を観察した。

その結果、処理区では 7月16日（12葉期）から花茎の分化が始まり、最終的には個体当たり 1~ 3本の花茎が抽苔した（図 1）。開花は 7月24日（14葉期）に始まり、下位の 1~時に 2節に雌花を、上位節には雄花を他のオモダカ属植物と同様に着けた（図 2、3）。しかし、種子の形成は見られなかった。また、GA無処理区では花茎の分化や開花は全く認められなかった。一方、9月初めから両区共に小球茎の形成が認められたが、GA処理区は対照区に比べて少なく、休眠も浅い傾向がみられた。

以上の結果から、花の形態は *S. wuyiensis* とは明らかに異なり、新種の可能性が極めて高いので、今後中国河北省武漢大学標本館に保蔵されている前 2種のタイプ標本との比較検討が極めて重要であると考えられる。

Harada, J., S. Zungsontiporn, S. Nakamura and K. Itoh: Induction of flowering by GA-application in Siam aginashi (*agittaria* sp.), an endangered species in the highlands of northern Thailand.

図 1 シyamアギナシの花茎分化

図 2 シyamアギナシ開花状況

図 3 シyamアギナシの開花状況
(左: 対照区、右: GA処理区)